

漢字音訳本『元朝秘史』の成立について

中村雅之

1. はじめに

モンゴルの歴史を記した三大史書として、中国語の『元史』、ペルシャ語の『集史』と共にモンゴル語の『元朝秘史』がある。ただし現行の『元朝秘史』(以下『秘史』)はオリジナルのウイグル文字本ではなく漢字音訳本である。すなわちモンゴル語本文が漢字の音訳によって綴られている。この音訳方式はかなり精密なものであるため、歴史の資料であると同時に中世モンゴル語の資料としても多大な価値を持つ。この書は漢字音訳による長大な本文に加えて、漢語による逐語訳(=「傍訳」)を本文の脇に添え、さらに段落ごとに漢訳(=「総訳」)を記している。小文ではこのうち「傍訳」に焦点を当てて、現行『秘史』の成立過程を考えてみたい。

『秘史』における傍訳がどの段階で加えられたかということについては論じられたものを知らない。常識的には本文ができてから傍訳が作られることは当然のことのように思われる。しかし、以下に述べるいくつかの根拠から傍訳は漢字本文よりも前に作られたと考えられるのである。

2. 小沢氏の指摘

1994年に岩波新書の一冊として出版された小沢重男『元朝秘史』は、『秘史』をめぐる様々な謎についての考察を記した書である。個々の結論には若干議論の余地もあるが、何より著者の考え方の筋道が全て記されている点において、とりわけ文字と音声と文献に関心を持つ者には有益なヒントが多く含まれている。

その48頁以下に音訳漢字で「秣<sup>ㄹ</sup>驪刺<sup>ㄹ</sup>忽」と記される語についての考察がある。小沢氏によれば、この部分は従来全ての研究者が「morilaqu」と読んできたが、正しくは本来「morilasu」であったはずであり、漢字音訳も「秣<sup>ㄹ</sup>驪刺速」とあるべきものだという事である。『秘史』と非常に多くの重複部分を有する(つまり『秘史』原本からの引用が多い)17世紀のルブサン・ダンザンの『アルタン・トブチ』において問題の箇所が「morilasu」とウイグル文字で記されていることが最大の根拠である。文脈から見ても形動詞語尾「-qu」よりも希望形「-su」を取って「出発しよう」と解釈する方が自然であるという。氏は「morilasu」が正しいというさらなる根拠として傍訳の「上馬我」を挙げている。「上馬」は「morila-」の傍訳であり、「我」は一人称希望形「-su」の傍訳字として常用されるものである。「-su」とあるべき箇所が「-qu」となったのは、ウイグル文字で「s」と「q」が似通った字形であり、誤読されたものと考えられる。

「秣<sup>ㄹ</sup>驪刺<sup>ㄹ</sup>忽」をめぐる小沢氏の指摘はおおむね妥当なものであり、およそ半世紀を『秘史』の研究に費やした研究者ならではの着眼というべきである。しかし小沢氏が触れなかった問題もある。それは「秣<sup>ㄹ</sup>驪刺<sup>ㄹ</sup>忽」という“間違った”本文になぜ「上馬我」という“正しい”傍訳が付いているのかという点である。この問題に対する答えはおそらく一つしかない。「上馬我」という傍訳は「秣<sup>ㄹ</sup>驪刺<sup>ㄹ</sup>忽」という漢字本文に対してではなく、「morilasu」という“正しい”ウイグル文字本文に対して付けられたと考えるべきである。つまり、漢字本文が成立する以前に傍訳はすでに成立していたと想定せざるをえない。

現行『秘史』の成立については、通常漠然と①「ウイグル文字本文」→②「漢字音訳本文」→③「漢字音訳本文+傍訳」という成立過程を想像しがちであるが、実際には①「ウイグル文字本文」→②「ウイグル文字本文+傍訳」→③「漢字音訳本文+傍訳」という過程を想定すべきだということになる。(総訳については直接議論には関係ないので無視してある。)

### 3. 栗林氏の研究

2002年の『言語研究』121に発表された栗林均氏の『元朝秘史』と『華夷訳語』における与位格接尾辞の書き分け規則については40年来の定説を修正した画期的な論文である。

『秘史』において与位格接尾辞「dur / tur」は「突<sup>𐰽</sup>児／途<sup>𐰽</sup>児／𠵽<sup>𐰽</sup>児」など多くの音訳字で記されるが、おおむね古典期モンゴル語と同様に、音声的条件によって書き分けられている。つまり、

- (1) 語幹が母音、二重母音、および子音n, ng, m, lに終わるもの。
- (2) 語幹が上記以外(子音γ, b, s, d, g, r)に終わるもの。

に対して、(1)には「突<sup>𐰽</sup>児」「都<sup>𐰽</sup>児」を用い、(2)には「途<sup>𐰽</sup>児」「𠵽<sup>𐰽</sup>児」を用いた。これを「語幹末音決定原理」と称する。ところがこの原理は『秘史』巻3以降には実によく当てはまるが、巻1・2にはほとんど適用できない。この問題について、村山七郎氏は「華夷訳語と元朝秘史との成立の先後に関する問題の解決」(『東方学』22、1961)において、『華夷訳語』と『秘史』巻1・2は「語種類決定原理」によって音訳字が決定されていると論じた。つまり、語幹を(A)形動詞、(B)人間・人間集団および動物、(C)その他に分類し、(A)には「突<sup>𐰽</sup>児」、(B)には「途<sup>𐰽</sup>児」、(C)には「𠵽<sup>𐰽</sup>児」が用いられたというのである。(巻3以降とは異なり「突<sup>𐰽</sup>児」のような小字の「舌」が用いられない。)

村山氏の「語種類決定原理」はいくつかの例外を含んでいたものの、『秘史』の巻1・2と巻3以降とが別々に成立したという根拠として重要な役割を果たした。しかし今回の栗林氏の研究によって、『華夷訳語』ならびに『秘史』巻1・2においてはより単純で明快な原理に基づいて書き分けが行われていることが判明した。すなわち「接尾辞の意味・用法決定原理」である。村山氏の「語種類決定原理」は「dur / tur」がどのような語に接続するかによる分類であったが、栗林氏はむしろ「dur / tur」がどのような意味で用いられているかに着目した。その際に利用したのが傍訳である。モンゴル語の与位格は以下の3つの用法に大別できる。

- (1) 動作の行われる時点を表す(～「に」): 傍訳「時分、時」
- (2) 動作の向かう方向を表す(～「へ」「～に」): 傍訳「行」
- (3) 動作の行われる場所を表す(～「で」「～に」): 傍訳「裏」

この3種の用法に対して(1)には「突<sup>𐰽</sup>児」、(2)には「途<sup>𐰽</sup>児」、(3)には「𠵽<sup>𐰽</sup>児」がほぼ一対一で対応していることが明らかになったのである。また、巻3以降においても「途<sup>𐰽</sup>児」と「𠵽<sup>𐰽</sup>児」の書き分けに全く同様の傾向が見出された。

さて、以上の栗林氏の研究を、前節に述べた『秘史』成立過程の仮説に基づいて見直すとどうなるであろうか。前節での結論は現行本『秘史』が①「ウイグル文字本文」→②「ウイグル文字本文+傍訳」→③「漢字音訳本文+傍訳」という過程で成立したというものであった。とすれば、栗林氏の言う「接尾辞の意味・用法決定原理」が適用される際にも、実際には接尾辞「dur / tur」の意味・用法を個々に検討したのではなく、すでに出て上がっていた傍訳を参考にしながら、ほぼ機械的に(傍訳「時分」には音訳字「突<sup>𐰽</sup>児」というように)当てはめていったのではあるまいか。「接尾辞の意味・用法決定原理」

に例外が非常に少ないことが一層その印象を深めるのである。もし傍訳の助けなしに接尾辞の意味・用法を分類しようとするれば、もっと判断のゆれが表れたのではないだろうか。例えば、日本語の助詞「～に」を考える際に、「方向」と「場所」を区別するのは容易ではない。しかしすでに傍訳においてその作業が済んでいるとすれば、それを見ながら音訳漢字を書き分けるのはいともたやすい。

#### 4. まとめと余論

以上、小文では小沢氏の指摘した事実（本文「秣<sup>𠂔</sup>驪<sup>𠂔</sup>刺<sup>𠂔</sup>忽<sup>𠂔</sup>」と傍訳「上馬我」）から、現行本『秘史』の成立においては、漢字音訳本文よりも傍訳の方が早く出来ていたという結論を導き出した。この結論は栗林氏の研究を補足（あるいは裏づけ）するものと言える。

この結論からもう一度振り返って「上馬我」の問題を考えると、一つのささやかな疑問がわきおこる。もし傍訳「上馬我」がすでに出来上がっていたとすれば、本文の漢字音訳者はなぜそれを参照しなかったのであろうか。「morilasu」を「morilaqu」と誤読すること自体は十分にありうるとしても、接尾辞「dur / tur」において行なっていたのと同様に傍訳に目を配っていれば、ウイグル文字が一見「-qu」に見えようとも「上馬我」を見た後で再び「-su」に訂正できたのではないか。

これについては次のように考えることができる。現行の漢字音訳本を作るに際して音訳作業には巻1・2と巻3以降とで質的な違いがあった。その第1は巻1・2においてはウイグル文字本文ならびに傍訳を目で見ながら音訳作業を行い、巻3以降においてはウイグル文字本文を口で読み上げながら音訳作業を行った。第2に、その結果として、傍訳の参照度は巻3以降では相対的に低かった。

巻3以降において「dur / tur」の書き分けが「語幹末音決定原理」という音声的な原理によっていることはすでに述べた。文字の上で区別が明瞭でない語（あるいは接尾辞）を区別して音訳作業を行うには、口で読み上げる過程が必要である。これに対して巻1・2では音声における差異を無視してまで「接尾辞の意味・用法決定原理」を採用し、傍訳を大いに参照するなど、口・耳よりも目による判断が優先した。

問題の「morilaqu / 上馬我」は巻5にあり、傍訳への依存度は巻1・2に比べて低かったと考えられる。一旦「morilaqu」と音読するや、傍訳には注意せずに「秣<sup>𠂔</sup>驪<sup>𠂔</sup>刺<sup>𠂔</sup>忽<sup>𠂔</sup>」と音訳したものであろう。

もっとも巻1・2において全く音声が無視されたというわけではない。副動詞接尾辞「ju / cu」は全巻を通じて「周 / 抽」で書き分けられている。とはいえ、巻1・2と共通の性格を有する『華夷訳語』がこの書き分けを行っていないのは示唆的である。